

スマート農業の死角を読んで

現在、日本では農業従事者の高齢化や担い手不足が深刻化しているのは確かな事実である。しかし、この記事でも指摘されているように、「便利だから」という理由だけで安易にスマート農業を導入していくと、日本の農業が本来持っている地域性や多様性といった特徴が失われてしまうおそれがあると考える。また、無人化や大規模化を進めて効率的な農業を実現することは、現状の課題に対する一つの有効な手段ではある。しかし、日本の農業の経営体系や土地条件を踏まえると、農業を単に工場のように機械化・効率化していくことが最終的な目標であってはならない。

最近、旅行や大学でのバスツアーなどを通して東北の各地を訪れる機会が多いが、そのたびに日本の豊かさを改めて感じることもある。それは、地域ごとに異なる環境や特色から生まれる特産品、美しい風景など、多様な自然と人々の営みが生み出す魅力によるものだ。だからこそ、今後の日本の農業は効率化だけでなく、地域の多様性や文化を尊重しながら持続的に発展していく形を目指すべきだと考える。そのためには、大規模化・無人化を進める部分と、多様性を残す部分の両立、いわばハイブリッドな取り組みが鍵になる。多様性を残す部分については、スマート農業から取り残すのではなく、それぞれの地域や経営形態に合った導入方法を模索し、落とし込んでいくことが重要である。記事の言葉を借りるなら、そうした細分化された農業にも対応できる“スマートな農村づくり”を目指すべきだと考える。

ウイズ生成 AI の時代を生きる

生成 AI の発展により、知識の整理や文章生成が容易になった一方で、単に AI に任せるだけでは自分の成長にはつながらないと感じている。大学生活の中で、知識を確認したいとき、関連資料を探すとき、文章の添削を依頼するといった限定的な場面で AI を活用することが最も効果的であると実感した。また、AI は誤った回答をすることもあるため、人間が常に真偽を確かめ、主体的に判断する姿勢が必要である。筆者が述べるように、効率化できる部分は AI に任せつつ、物事の核心や価値判断は人間が担うべきであり、「人間が AI を動かすのであって、AI に動かされてはならない」という意識が重要だと考える。今後 AI がさらに進化する中でも、AI との適切な共存を図り、人間の思考や創造性を保つことが農業をはじめとした社会全体の発展につながるだろう。